

守。道に居る番人。○宵々ごとに 毎夜々々。宵は夜と同意に用ゐてある。○うちもねなむ。「うち」は接頭語。「ね」は寝。「ねな」の「な」は過去の助動詞「ぬ」の將然形。「なむ」は希望の助動詞。寝てしまつてほしい。

【大意】 昔五條の邊に戀人があつて、夜毎に通つてゐたが、こつそりと行かねば成らない所なので、門からは入らないで、土堀の崩れた所から出入してゐたのが、其が度重なつて、家の主人が、自分が通つて居ることを聞きつけて、自分の通つて行く處(土堀の崩れた所)に番人を隠して女を守らせたから、逢ひに行つたけれども、逢ふことが出来なくて歸つて来て、女に詠んで送つた歌——人に知られずこつそり通つて行く道の、あの番人は、毎夜々々寝てしまつてほしいものだ。

【餘言】 この歌は伊勢物語の初の方に出てゐる。詞書が少し違つてをるから、引用してみる。「昔男ありけり。東の五條わたりにいと忍びていきけり。密なる所なれば、門よりもえ入らで、童の踏みあけたる築地のくづれより通ひけり。人しげくしもあらねど、度重なりければ、あるじ聞きつけて、その通ひ路に、夜毎に人をすゑて守らせければ、彼の男、いけどもえ逢はで歸りけり。さてよめる。人知れぬ……うちも寝なむ。と詠みけるを聞きて、いといたう(女が家ノ主ヲ)怨じけり。あるじ(二人ガ逢フヲ)許してけり。

○

小野小町

秋の夜は名のみなりけりあひしあへば事ぞともなくあけぬるものを

【語釋】 ○名のみなりけり 長いと云ふ評判だけで、實は一向長くはなかつた。○あひしあへば、「し」は意味を強める辭。逢つて見れば。流布本には「逢ふといへば」とある。意味から云ふと、「あひしあへば」の方がいよ。○事ぞともなく。何と云ふこともなく。逢つたと云ふ程のこともなく。十分語らふ暇もなく。

【大意】 長いものと一般に云はれてゐる秋の夜は、云ふだけで、實は一向長くはなかつた。戀しい人に逢つて見れば、何を話し會つたとも思はぬ中に、夜が明けてしまつた。

○

躬恒

長しとおもひぞはてぬ昔よりあふ人がらのあきの夜なれば

【語釋】 ○おもひぞはてぬ 「ぞ」は意味を強める辭。「ぬ」は打消の助動詞。思つてしまはない。さう決めてしまはない。「はてぬ」は終てぬの意。例外なく云々と決めてしまはないの意。○あふ人がらの 逢ふ相手次第の。(相手がつれない人なら秋の夜を長く感ずるし、相思の間柄なら、秋の夜も明けやすいのを嘆ずるのだから)。

【大意】 自分は秋の夜を必ず長いものと思ひ決めては居ない。それは昔から。逢ふ相手に依りて秋の夜が長いとも短いとも感ぜられる。貴方によつては短い。

○

藤原國經朝臣

寛平御時中宮の歌合に

あけぬとていまはの心つくからになどいひしらぬ思ひそふらむ

【語釋】 ○あけぬとて 夜が明けてしまふと云つて。 ○いまはの心つくからに 今は別かれぬと思ふ心が添ふにつけて。「からに」は、云々に従つて、云々につけての意。 ○などいひしらぬ思ひそらむ。何故まあ、云ふに云はれぬ情ない氣がするのだらう。因に「思ひそらむ」の「らむ」は第三句「つくからに」の「からに」を受ける。「など」を受けるのではない。○作者國經は藤原長良の長子で、關白基經の兄。大納言正三位。延喜八年、八十二歳で薨。

【大意】 夜が明けてしまふと云つて、もう別かれなければ成らぬと思ふと、何故まあ、その時になると云ふに云はれぬ情ない氣がするのだらう。(きぬぎぬの悲しさを歌つたもの)

○

あふ事は玉の緒ばかり名のたつは吉野のかはのたぎつせのごと

【語釋】 ○玉の緒ばかり ほんの少し。 ○たぎつせ 「たぎつ」は沸き立つ、逆巻く。「せ」は急流。「たぎつせ」で奔濤する急流。 ○讀人しらずの歌。

【大意】 二人が逢ふのは、玉の緒程の僅かな間であるのに、名は吉野川の奔濤する急流の様に世間へ響き渡る。(まゝならぬ世である)。

○

伊 勢

知るといへば枕だにせてぬしものをきりならぬ名の空にたつらむ

【語釋】 ○知るといへば。枕はどんなに秘してゐる間中の秘事でも知つてゐると云ふから。 ○きりならぬ名の空にたつらむ。「空にたつ」は、ぼつと世間に廣まること。霧ならば空に立つのは當然だが、霧ではない、何故世間に廣まつたのだらう。流布本には「ちりならぬ名の」とあるが、枕と云ふ語との續き工合が考へると「ちり」の方がいい。「空」の関係からは「ちり」の方がいい。

【大意】 (あんなに秘し隠して、あなたと一處に寝た事が、即ち枕は國中の秘密を知つてゐると云ふから、枕にさへも知らせまいと思つて、枕もせげに、こつそりあなたと寝た事を、如何して人が知つて、こんなに世間の評判になつたのだらう)。

古今和歌集 卷第十四

戀 四

題 不知

讀人知らず

みちのくのあさかの沼の花かつみかつみる人のこひしきやなぞ

【語釋】 ○戀四 流布本は「戀歌四」とある。 ○みちのくのあさかの沼の花かつみ。この三句は次の「かつみる」の序詞。「みちのく」は奥羽地方。「あさかの沼」は岩代國安積郡にある。「花かつみ」の「かつみ」から次の「かつみる」に係つて行くのである。「花かつみ」は異説があつて、解釋が一定してゐないが、大方あやめの類であらう。 ○かつみる人のこひしきやなぞ 一寸見人を何故戀しく思ふのだらう。流布本には「かつみる人にこひやわたらむ」とある。

【大意】 (初三句は序) 一寸逢ふ人を戀しく思ふのは何故だらう。流布本に依れば、一寸逢ふ人を何故戀ひつゞけることであらう。

藤原忠行

君といへば見まれ見ずまれふじのねのめづらしげなく燃ゆるわが戀

【語釋】 ○見まれ見ずまれ 見るにもあれ。見ないにもあれ。見ても、見なくても。 ○ふじのねの 富士の嶺の。「燃ゆる」にかゝる枕詞。富士山は當時噴火してゐたのである。 ○めづらしげなく。珍らしげもなく。いつでも。 ○作者忠行は有貞の子。延喜六年に若狭守になつた人。

【大意】 あなたの事と云へば、逢ふにつけ、逢はぬにつけ、いつも私は戀ひ焦がれてゐます。

伊勢

夢にだに見ゆとはいははじあさなわが面影にはづる身なれば

【語釋】 ○見ゆとはいははじ。「見ゆ」は人に逢ふ事。あなたとは夢の中でも逢ふたさは私は云ふまい。流布本には「見ゆとは見えじ」とある。「見え」は人に見られる事で、あなたが、私と逢つたとは夢にも見て頂きますまいの意。 ○あさなわが面影…… ○わが面影にはづる身なれば 鏡に映る姿が餘りに寢れてゐる爲に、自分で恥しくなる身だから。「あさなわが面影……」とあるので、面影は女が朝の身嗜に衣や髪を調へる時に、鏡に映つる影と解する事が出来るのである。

【大意】 現實にはもうお目にかゝりますまい。吾夢の中にでも私は、あなたにお目にかゝるとは申しますまい。毎

朝鏡に映る姿の餘りにも寢れてゐるのに、自分ながら恥しくなるのですもの。どうしてお目にかゝつたり出来ませうよ。

素性

今こむといひしばかりに九月のありあけの月を待出づるかな

【語釋】 ○いひしばかりに 云つただけの爲に。 ○ありあけの月 夜が明けてからある月。 ○待ちぞ出づる 待つてゐる中に出る。(出るのと待つのは違ふ。「待つ」が主で、「出づる」は従である)。

【大意】 すぐ参りませうと君が云つたばかりに、この夜の長い九月の夜を眠りもせず待ちに待つて、とろく君を待ち得ず、却つて有明の月を待ちつけてしまつた。(技巧も勝れてゐる。いゝ歌である。百人一首に入つてゐる)。

讀人しらず

月夜よし夜よしと人に告やらばこてふに似たり待たずしもあらず

【語釋】 ○月夜よし夜よし 月夜よしくと語を重ね、下の「月夜よしの」月を略したのである。 ○こてふ 來いといふ。「こ」は來(加行變格活用)の命令形。「てふ」「といふ」の約言。

【大意】 い、月夜です、と人に通知をすると、お出でなさいと云ふのに似て居る。お出でなさいと云ふのではないけれど、かういふ便りをする、ひよつとして来るかも知れない、と思ふと心待ちがせられる。
集巻六に

わが宿の梅咲きたりと告げやらば来ちふに似たり散りぬともよし
と云ふのがある。この歌を土臺にして詠んだ歌であらう。

○
きみこそは聞へもいらじこむらさきわが本結にしもおくとも

【語釋】 ○聞 寢室。寢床。 ○こむらさき 濃い紫。もとゆひの色。 ○わが本結にしもおくとも。黒髪を結んである濃紫の本結に夜が更けて霜が置くとも。紫、黒、白い霜と三つの色を対照して用ゐてゐる。一説に、濃紫の本結は、元服の時に用ゐるものであると云ひ、霜が置く、を、白髪になるの意とし、黒髪が白髪になるまでも、あなたの来るのを待つて居らうと云ふ意に解する。が猶前説がいと思ふ。 ○讀人しらすの歌。

【大意】 あなたが来られない以上、私は聞へも入らずに外で待つて居りませう。濃紫の元結に白く霜が置いて、聞へ入らずに待つて居りませう。

○

梓弓ひき野のつゝらすゑつひにわがおもふ人にことのしげけむ

この歌は、ある人のいはく、あめのみかどの、近江の采女に給ひけるとなむ。

【語釋】 ○梓弓 「ひき」の枕詞。 ○ひき野 河内國日置(今はヘキと云つてゐる)。 ○つゝら 葛のこと。「梓弓ひきのつゝら」は第三句以下の「すゑ……しげけむ」にかゝる序詞。 ○すゑ 「つゝら」を受け、將來、行く末の意。 ○ことのしげけむ。「こと」は言。世間の噂。「しげけむ」は繁けむ。繁りあるだらう。 ○この歌は云々 例の左註である。「あめのみかど」は一説に天智天皇ともいひ、又一説には聖武天皇と云ふが、明でない。

【大意】 (「梓弓ひきのつゝら」は序詞)。行く末には、きつと、私の思つてゐるあの方に、うるさく浮名のたつことであらう。

○

藤原の敏行朝臣、業平の朝臣、家なりける女をあひしりて、ふみつかはせけることばに、今まうでく、雨のふるをなむ、みわづらひ侍る。といへりけるを聞きて、かの女にかはりて

業平朝臣

かずかずにおもひおもはずとひ難み身をしる雨はふりぞまさらむ

【語釋】 ○今まうでく 「今」は今すぐに。「まうで」は詔。「く」は來の終止形。今すぐ參る。 ○雨のふるをなむ 流布本には「雨

のふりけるをなむ」とある。清輔本には「あめのふりげなるをなむ」とある。「雨が降りさうなのを」とある。これに依れば敏行が手紙を書いた時はまだ雨が降つてゐなかつた意になる。○みわづらひ侍る 見合せて。行かうか行くまいかと思つて躊躇してゐる。○かずかずに くれぐれに、次の「おもひ」にかゝる。こゝでは、深く本當に云ふ程の意。古今集卷十六の「かずぐにわれを忘れぬものならば」の歌の條参照。○おもひおはず あなたが私を思つてゐるのか居ないのか。○とひ難み。「み」は形容詞の語根に添うて「の故に」と云ふ意になる。問ひ難いので。○身をしる雨 自分がどの程度に人から思はれて居るか身の程を知る雨——深く愛されてゐるなら雨が降つても男は来るであらうし、本當に愛されてゐないのなら、男は来ないだらう。○ふりぞまさらむ。「らむ」は推量の助動詞。降りまさるであらう。流布本には「ふりぞまされる」とある。降りまさつてゐる。

【大意】 藤原敏行が業平の家の女と戀愛關係を結んで、手紙を送つた、その言葉に、今すぐ參る、(が)雨が降るのを躊躇してゐると云つてあつたのを業平が聞いて、その女に代つて詠んだ歌。——本當に私を深く思つてゐて下さるのか、思つては下さらぬのか、お問ひしにくいので、迷つてゐるのですが、今日は、私がどの位にあなたに思はれてゐるかを知るべき雨が、降りまさる事でしやうよ。(この歌も詞書伊勢物語に出てゐる)

○
女の、業平所さだめずありきすと思ひて、よみてつかはせりける

よみ人しらず

大幣おほなべのひくて數多おほかずになりぬればおもへどえこそたのまざりけれ

【語釋】 ○所さだめずありきす。何處に定めずに氣の向いた方に、あちこちに愛人をつくる。「ありきす」は歩く。○大幣の「ひくて數多」の枕詞。大幣は大勢が手んでに引くものである。業平が多くの女の引張り合ひになつてゐるのを譬へた語。○えこそたのまざりけれ。頼みに思ひ得ない。(この歌伊勢物語に出てゐる)

【大意】 業平が氣の向くまゝに彼方此方の多くの女と關係すると思つて、或る女が詠んで業平に送つた歌——あなたと契を結ぶ女が澤山になつたから、私はあなたを、淺からず思つてはゐるけれど、ひたすらに頼みに思ふ事は出来ません。

○
題知らず

よみ人しらず

すまのあまのしほやく煙風をいたみ思はぬかたにたなびきにけり

【語釋】 ○すまのあまのしほやく煙風をいたみ 初句、元永本には「すまのうらに」とあるのであるが、流布本を初め、諸本多く「すまのあまの」とあり、この方が意味がよく通るから、これに従つておく。「すま」は攝津國武庫郡の海岸。「風をいたみ」は風が強く吹く爲に、この初三句は次の「思はぬ方にたなびきにけり」の序詞である。○思はぬ方 本人の希望せぬ方向。○たなびく「た」は接頭語。靡く。

【大意】 (初三句は序詞)本人が希望してゐない方向へ靡いてしまった。(思ふが他から強要せられて他の男の方へ行つてしまった)。

【餘言】 この歌も伊勢物語に出てゐる。「昔、男、懇にいひ契りける女の、ことさまになりければ」とあつて、「須磨の海人の云々」とある。因に萬葉集卷七に、

志珂の白水郎の鹽焼く煙風をいたみ立ちはのぼらず山にたなびく

と云ふのがある。調子も内容も殆んど同じである。これから轉じたのであらう。

○

素性

そこゐなき淵やはさわぐ山がはの浅きせにこそうはなみは立て

【語釋】 ○そこゐ。流布本には「そこひ」とある。「ひ」の方が正しい。萬葉集卷十五に「安米都知乃 會許比能字良爾 安我其等久 伎美爾故布良牟 比等波左禰安良目」とある。至極、極まりの意。○淵やはさわぐ 淵は風波が立つて騒ぐだらうか、騒がない。○山がは 山の間を流れる川、谷川。○うは波 表面的な波。六帖にも素性集にも「うは波」とあるが、流布本には「あだ波」とある。

【大意】 限りもなく深い淵は波が立たうか立ちはしない。谷川の浅い流にこそは、上つ調子な波が立つのだ。といふのが表の意で、裏の意は、本當に深く思つてゐる人は、其を表面に現はしたりはしないものだ。仰山らしく表面に現はして思つてゐるとか何とか云ふ人は、實は深く思つて居ないからなのだ。

○

河原左大臣

みちのくのしのぶもぢずり誰故に亂れそめにしわれならなくに

【語釋】 ○みちのくのしのぶもぢずり。「亂れ」にかゝる序詞。「しのぶ」は信夫。岩代國にある地名。「もぢずり」は振摺で、草の莖葉を布帛の上に置いて色々の色に摺つたもので、その紋様が亂髪のように、交錯してもぢられてゐるので云ふ。陸奥の信夫の振摺の意。○亂れそめにし 心が戀の爲に亂れ初めた。流布本には「みだれむと思ふ」とある。これに従ふと意味が大分違ふ。

【大意】 (初二句は序詞) 誰の故にも心が亂れそめたのではない。あなた故に心が亂れそめたのです。(第四句を「亂れむと思ふ」に従ふと、他の誰の故に心を亂さうと思ひませうか、みんな貴方故です)この歌百人一首に入つてゐる。但し第四句は「亂れそめにし」となつてゐる。

○

伊勢

わたつみとあれにし床を今更にはらはゞそでや泡とらきなむ

【語釋】 ○わたつみと わたつみの如く。「わたつみ」は海。○はらはゞ 拂ふなら。塵を拂ふなら。○泡とらきなむ 泡の如く浮くであらう。

【大意】 あなたが長く來られないから、獨り寝の悲しさに海の如く、荒れてしまつたの床を、今更になつてあなた

が來られると云つて、拂ふならば、袖が泡の様に浮く事でしょうよ。誇張した歌である。

○

右のおほいまうちぎみ、住ますなりにければ、かの昔おこせたりけるふみどもを、とりあつめてかへすとて、よみておくりける

内侍典 藤原因香

たのめこしことのはいまはかへしてむ我身ふるればおき所なし

【語釋】 ○右のおほいまうちぎみ 右大臣。「おほいまうちぎみ」は大臣のこと。「おほい」は大の意。尊稱。「まうちぎみ」は

「まへつきみ」の音便。「まへつきみ」は天皇の御前に侍ふ高位高官の人の意。こゝの右大臣源能有のこと。 ○住ますなりにけ

れば 男が女の所へ夜毎に通つて、夫婦關係を結ぶのを「住む」と云ふ。男が通つて來なくなつたから。夫婦の縁が切れたから。

○たのめこし 「たのめ」は頼みに思はせるを云ふ。「こし」は來た。今まで頼ませて來た。(元永本には「たのめけむ」とあるの

であるが、「けむ」では意味が通し難いから、流布本に従つておいた)。 ○かへしてむ 返へしてしまはう。「返へしてむ」の

「て」は過去の助動詞「つ」の將然形。「む」は未來の助動詞。 ○我身ふるれば 我身が舊されたから。

【大意】 右大臣が、自分と縁が切れたから、以前に自分に寄せた手紙等を、集めて、返へす時に詠んで送つた歌。

——今まで頼みに思はせて來たあなたの愛情のこもつた手紙をもうお返へしてしまひませう、私はあなたに舊さ

れたから、こんな手紙は置いておく所がありませんから。

○

讀人しらず

題 不知

かたみこそ今はあだなれこれなくば忘るゝ時もあらましもものを

【語釋】 ○あだ 仇の意。 ○あらましものを 「まし」は推量の助動詞。あるだらうものを。

【大意】 戀しい人の残しておいた形見が、今となつては却つて仇となつた。この形見が無かつたら。忘れてゐる時

もあるだらうのに。(形見がある爲に、いつも思ひ出しては悲しい思ひをせなければ成らない)——(この歌伊勢物

語に出てゐる。)

古今和歌集 卷第十五

戀 五

五條の后宮なきののみやの、西の對むかひにすみける人に、ほにはあらで、ものいひわたりけるを、正月の十日あまり許はかりになむ、外へかくれにける。ありどころは聞きけれど、えものもいはで、またのとしの春、梅花うめのはなさかりに、月のおもしろかりける夜、去年こぞをこひて、この西の對むかひにきて、月の傾くまで、あばらなる板敷いそぢにふせてよめる

在原業平朝臣

月やあらぬ春や昔のはるならぬわが身ひとつはもとのみにして

【語釋】 ○五條の後 宮藤原冬嗣の女の順子 仁明天皇の皇后。 ○西の對にすみける人 西の對の屋に住んでゐた人。后宮の姪に當る人で、藤原高子、清和天皇の女御になられた人で二條の后と云はれた人。「西の對」は寢殿造りの邸宅では、中央に南面して寢殿があり、その東西に「對の屋」と云ふ一棟がある。——寢殿とは廊下で接續する。西の方にある對の屋を西の對と云ふ。 ○ほにはあらで 「ほ」は表面、公。公然とはなく。流布本には「ほいにはあらで」とある。「ほい」は本意。 ○ものいひわたりける 戀愛關係を結んだ。 ○えものもいはで 訪れることも出来なくて。 あばらなる板敷。荒れた板敷。 ○月やあらぬ 「や」は疑問詞。この句は反語になる。月は去年と同じ月ではないか、同じ月だ。 ○春や昔のはるならぬ 春は去年と同じ春ではないか、同じ春だ。 ○わが身ひとつはもとの身にして 自分の身だけは、去年と同じであつて、然も同じ身の上ではないの意。

【大意】 五條の后宮の邸の西の對に住んで居た女に、こつそり、契を結んでゐたが、正月の十日頃に、その女が姿を隠してしまつた。隠れてゐた所は聞いたけれど、訪れる事も出来なくて（月日を経）、翌年の春、梅の花が盛りで、月の美しかつた夜、前年の女との契を慕はしく思つて、この西の對へ行つて、月が傾くまで、荒れた板敷に寝ころんで、以前の事を追懐して詠んだ歌。——月は去年と同じ月ではないか、同じ月だ、春は去年の春と同じ春ではないか、同じ春だ、然も自分の身だけは、去年と同じ身でありながら、境遇は全く變つてしまつた。

うきめのみおひて亂る、浦なればかりにのみこそあまはよるらぬ

【語釋】 ○うきめ 浮き海布、に憂き目をかけてある。 ○おひて 生えて。 ○亂る、 流布本には「流る」とある。 ○浦 入江。自分に譬へてある。 ○かり 刈り、と假にかけてある。 ○あま 海人と、自分の所へ通つて来る男にかけてある。 ○讀人しらずの歌。

【大意】 (表の意味は) 浮き海布ばかり生え繁る浦だから海人が刈りにばかり寄るのであらう。と云ふのであるが、裏の意は) 憂くつらい目にばかり會つて居る自分だから、思ふ人が来てくれるのも、唯かりに一寸来るだけなのだらうよ。

題知らず

讀人知らず

須磨のあまの鹽やき衣をさをあらみ間遠にあれや君が來まさぬ

【語釋】 ○須磨のあまの鹽やき衣をさをあらみ。この三句次の「間遠」の序詞。「鹽やき衣」は鹽を焼く者が着る粗末な着物。○をさをあらみ をさ(箆)は機を織る時に、たて糸を通すもの。箆を粗くすれば、織物は粗になつて、織目は間遠になる。「あみ」は粗いから。粗い故に。 ○間遠にあれや。間遠である故か。間遠は間隔の遠いこと。こゝは住居の隔つて居ること。

【大意】 (初三句は序詞) 住居が遠く隔つてゐるからだらうか、待つても待つてもあなたは來て下さらない。

あかつきの鳴のはねがきも、はがき君が來ぬ夜は我ぞかずかく

【語釋】 ○あかつきの鳴のはねがきも、はがき 鳴は曉方に特に屢々羽をつかふ。(羽を嘴でしごいて調へる)ので曉の鳴の羽極き云ひ、語を重ねて「百羽掻き」と云ふた。 ○かずかく 歎きもだえて輾轉する。この歌は同音の語を多く用ゐてゐる爲に非常に調子がいい。

【大意】 曉の鳴は屢々羽をつかふが。君の來ない夜は私が歎きもだえて輾轉する。

○

兼 藝 法 師

もろこしも夢にみしかば近かりき思はぬなかぞはるけかりける

【大意】 唐土も夢に見たから思つたより近いものであつた、が相ひ思はぬ間がらは、夢にも見ないから、遠いものであつた。

〔餘言〕 實際上遠い距離にある唐土と、近い愛人とを比し、夢に見るか否かに依つて、精神上の遠近を比較したものである。

○

題 知 ら ず

讀 人 知 ら ず

來めやとは思ふものからひぐらしのなく夕暮はたちまたれつ、

【語釋】 ○來めや 來はしないだらう。 ○思ふものから。思ふけれども。 ○たちまたれつ、「たち」は接頭語。立つて待つ意ではない。

【大意】 來はしないだらうとは思ふけれども、鯛の鳴く夕暮になるこ、やはり心待ちせられる。

○

兼 覽 王

住の江のまつほどひさになりぬればあしたづの音に泣かぬ日はなし

【語釋】 ○住の江のまつ。「住の江」は住吉。「まつ」は松と待がかけてある。住吉の松は老木として有名である。 ○あしたづの。「音に泣く」の枕詞。「あしたづ」は芦鶴の意 鶴の事。 ○作者兼覽王は惟喬親王の御子。正四位延長三年に宮内卿になられた方。

【大意】 住吉の年を経た松程、久しい間待つてゐる身は、悲しさに聲を出して泣かぬ日はない。

○

心地そこなへりける頃、あひしりて侍りける人とはで、心地おこたりてのち、訪へりければ、よみてつかはし

ける。

兵衛

しでの山ふもとよりのみ歸りきぬつらき人よりまづ越えじとて

【語釋】 ○心地そこなへりける頃 病氣になつてゐた頃。 ○とはで 訪れないで。 ○心地おこたりてのち 病氣がなほつて後。 ○しでの山 佛教で死を重大な時期と見、此を山に譬へて説いたのが、誤り傳へられて死んでから次の世へ行く途中に死出の山と云ふ山がある如く云はれる様になつた。こゝは其の山があるとして詠んでゐる。 ○ふもこよりのみ歸り來ぬ 流布本には「ふもとをみてぞ歸りにし」とある。同じ意である。死出の山を越えないで、再び此世へ歸つて來たの意。一度死にかゝつて癒つた事を云ふのである。 ○つらき人 同情のない人。無情な人。 ○まづ越えじ 先には死出の山を越すまい。死ぬまい。 ○作者兵衛は右兵衛藤原高經の女。

【大意】 自分が病氣をしてゐた頃、前から親しくして居た男が、見舞に來ずに、病氣が全快してから訪れて來たので詠んで送つた歌。——私は死出の山の麓まで行つたけれど、(死にかけたけれど)山へは登らずに歸つて來ましたよ、同情のないあなたより先に、あの山を越えたくはないと思ひまして。(薄情なあなたより先に死に度くは無いと思つて)——氣持よく皮肉つた歌である。

讀人知らず

あはれとも憂しとも物を思ふ時などかなみだのいとながるらむ

【語釋】 ○あはれ あゝと心に感ずること。 ○いとながるらむ ながるらむに流れるをかけてある。いととは間なくの意。(後撰集に「春の池の玉もにあそぶには鳥の足のいこなき戀もするかな」と云ふがある)

【大意】 あゝと感ずる時にもつらいと思ふ時にも、何故暇なく涙が流れるのであらう。

題知らず

伊勢

人しれずたえなましかばわびつゝもなき名ぞとだにいはましものを

【語釋】 ○たえなましかば。「な」は過去の助動詞「ぬ」の將然形。「まし」は推量の助動詞。絶えてしまふならば、 ○なき名ぞとだにいはましものを。事實無根の噂だとだけでも云はうものを。「ば」とありましとあるので反對の意になる。

【大意】 私達の關係が世間に知れずに、そして二人の關係が絶えてしまふのなら、別れるのはつらいけれども、私達の噂をする人があつても、其は事實無根の噂だと打消して體面だけでも保たうものを。二人の關係はあまり明らかに世間に知れ渡つてしまつた。そして今更捨てられては、實際立つ瀬が有りませんね。

讀人知らず

それをだに思ふ事とてわが宿を見きとないひそひとのきかくに

【語釋】 ○それをだに それ位の事だけでも。「わが宿を見き」に係る。 ○思ふ事とて 私の願として。お願だから。 ○ひそ

のきかくに「かく」は「く」の延言。人が聞くから。

【大意】 それだけでも、即ち私の家を見たといふ事だけでも、お頼だから人には云はないで下さい。人が聞き耳を立て、私達の関係を感じ付く様になるから。

○

磯邊よりくもみをさしてゆくかりのいや遠ざかるわがみかなしも

【語釋】 ○磯邊より 流布本には「あしべ」とある。 ○くもみ 大空のこと。雲の居る所の意。 ○磯邊よりくもみをさして行く雁の。この三句は、次の「いや遠ざかる」の序詞。 ○いや。いよく、ますく。 ○遠ざかる 「さかる」は離れる事。遠く離れる。 ○讀人しらずの歌。

【大意】 (初三句は序詞) 思ふ人との間がいよ／＼ます／＼遠くなつてゆく自分の身は、悲しい事だ。

○

小町

秋風にあふたのみこそ悲しけれわが身むなしくなりぬとおもへば

【語釋】 ○秋風にあふたのみこそ悲しけれ。「たのみ」は稻の實、と頼みにかけてある。「田の實」は米の意。因に「頼み」は「むなしく」に係る。 ○わが身。身に實がかけてある。

【大意】 (表の意は——秋風に逢ふ稻は、まことに悲しい。百姓が頼にして居る實が空しくなつてしまふと思ふ

古今和歌集選釋

定價金壹圓五拾錢

昭和十年一月十日印刷
昭和十年一月十五日發行
昭和十三年十月一日再版印刷
昭和十三年十月五日再版發行

國文學大講座刊行會

編輯者 代表者 吉川與志次

發行者 東京市神田區神保町六七

伊藤嘉市

印刷者 東京市神田區神保町六七

伊藤藤嘉市

不許複製

東京市神田區神保町一丁目六十七番地

東京書院内

發行所 日本文學社

京都市下京區四條通り大宮東入

洛東書院

電話 壬生九九四番
振替 京都三三〇一番

終

